



Weekly Market Report

FX, JPY Interest Rate, Topics

Jun 29, 2026

1. 為替相場概況

介入警戒で上値は重い中、米利上げの確度を見極めるうでも雇用統計には注目。

USD/JPY (1週間の値動き)



コメント

先週のドル円相場は161円台での狭いレンジで推移。160円を超える相場が続くなか、月曜夜の片山財務相とベッセント米財務長官のオンライン会議報道を受け、為替介入への警戒からドル円は一時161円台前半まで下落。しかし、先週のFOMC以降FRBが年内に利上げを実施するとの見方が強まっていることから下値は堅く、水曜日には161円台後半までドルが買い戻される展開。更に木曜夜には2024年7月高値水準目前の161円90銭台まで上昇したものの、その後発表の米5月PCEが市場の警戒したほどの内容ではなく米年内利上げ観測が後退し、更なる上値追いはならなかった。週末には日経平均の大幅安や米金利低下を背景にドル売り円買いが優勢となり161円台半ばまで下落する場面も見られたものの、結果的には161円後半まで買い戻され越過。今週は日米で経済指標の発表が相次ぐほか、米独立記念日で米雇用統計が木曜日に前倒しで発表される点に留意したい。米指標の結果次第ではドル円が一段高となる可能性がある一方、為替介入リスクも否定できず高値圏では当局の動きに注意が必要だ。(市場営業部/黒川)

今週の経済指標 (予定)

日付	イベント	予想
6/30(火)	MNIシカゴPMI (米国)	55.4
6/30(火)	JOLTS求人 (米国)	728.8万人
7/1(水)	日銀短観 (日本)	-
7/1(水)	ISM製造業景況指数 (米国)	53.9
7/2(木)	米雇用統計 (米国)	-

USD/JPY (5年間)



今週のレンジ予想 (USD/JPY)

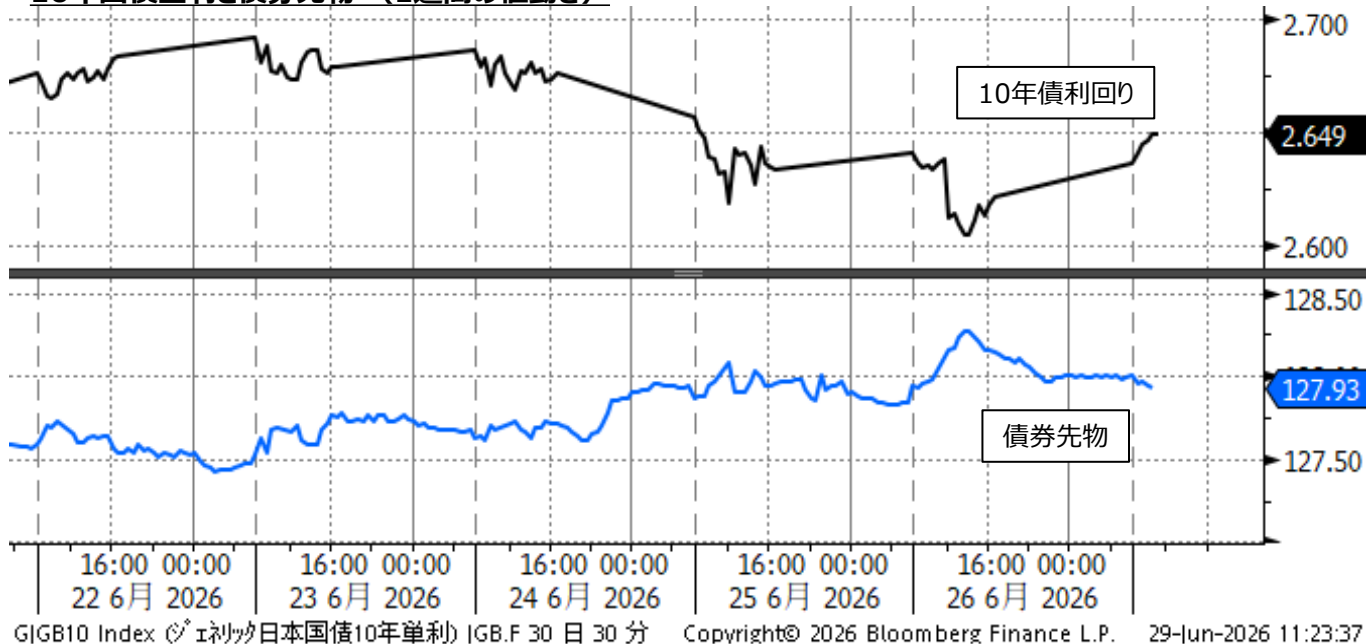
(出所) Bloomberg

予想者	今週のレンジ	予想のポイント
川上茉奈	160.00 - 162.00	雇用統計が予想より上振れた場合には、162円突破の可能性あり。その後の為替介入に要注意。
下出康平	160.50 - 162.30	雇用統計を意識した米追加利上げ観測と為替介入の警戒感が交錯する神経質な値動きとなりそうだ。

2. 円金利相場概況

先週は米イラン合意により、金利大幅低下。今週も海外要因に注意。

10年国債金利と債券先物（1週間の値動き）



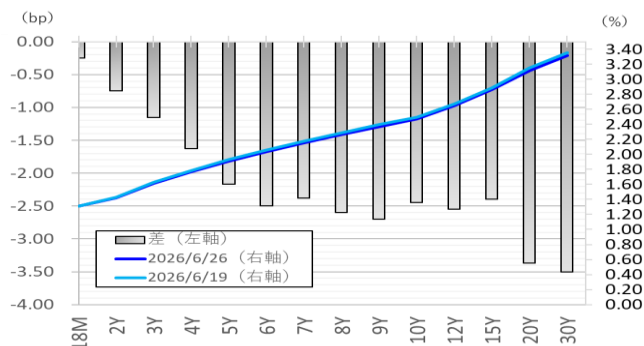
コメント

(出所) Bloomberg

先週の円金利は大幅低下。週初は米イラン協議をにらみ、原油先物価格が上昇した流れを受け、金利は上昇してスタート。23日に行われた5年債入札は低調な結果を受け止められたことで金利は上昇基調で推移。24日は原油価格の低下やベッセント財務長官の債券市場配慮の発言などにより、円金利は引けにかけて小幅に低下。25日はホルムズ海峡の航行正常化を伝える報道で米金利が大幅に低下した影響を受け、円金利も大幅に低下。26日には米国のハイテク株安を受けた韓国株の急落を受け、円金利は続落。10年債利回りは2.62%程で越週した。

今週は7/1に行われる公開討論会でのウォーシュFRB議長の発言内容や米雇用統計に着目。引き続き中東情勢のヘッドラインには注意を払うとともに、ウォーシュFRB議長が引き続きタカ派的姿勢を維持したと市場が受け止めた場合や、雇用統計が堅調だった場合の金利上昇圧力の高まりを警戒したい。(市場営業部/鈴木)

金利スワップ変化（1週間）



10年円金利スワップ推移（5年間）

(%)



今週のレンジ予想（10年国債利回り）

(出所) Bloomberg

予想者	今週のレンジ	予想のポイント
伊豆浦有里恵	2.52%－2.70%	期末の買い一巡後で底堅く推移も、利上げ観測から金利低下は限定的。一方で急な金利上昇も抑えられ一進一退の展開か。
小野口裕美子	2.55%－2.70%	国内は利上げ継続姿勢から上昇基調が続くも、海外要因で振幅も大きくなりそう。1日の日銀短観・ウォーシュ議長発言に注目。

3. 今週のトピックス 人民元相場見通し

米中の関係性は比較的安定化。中国では引き続き内需拡大がテーマ。

<中国の経済状況>

中国の2026年1-3月期実質GDP成長率は前年比+5.0%増と市場予想を上回る結果となった【図1】。成長率増加の背景としては、AI関連製品や、半導体関連の輸出が予想以上に堅調であり、前年同期比+14.7%と大きく上回ったことや、3Dプリンター設備や工業用ロボットの生産が増加したことが要因。5月の消費者物価指数(CPI)については、前年比+1.2%上昇【図1】。これで8ヶ月連続のプラスとなった。中東情勢問題の長期化に伴い、原油価格の高騰が物価を押し上げた。一方で、食品価格（特に豚肉）の下落が全体のインフレの伸びを抑制した。デフレから緩やかにインフレへとシフトしつつあるが、CPIの上昇要因はエネルギー価格の上昇によるものが大きく、企業の仕入れコストが上昇している中で、そのコストを十分に価格転嫁できていないとも捉えられる。引き続き中国当局は景気を安定させ内需を回復させていく政策が求められる。

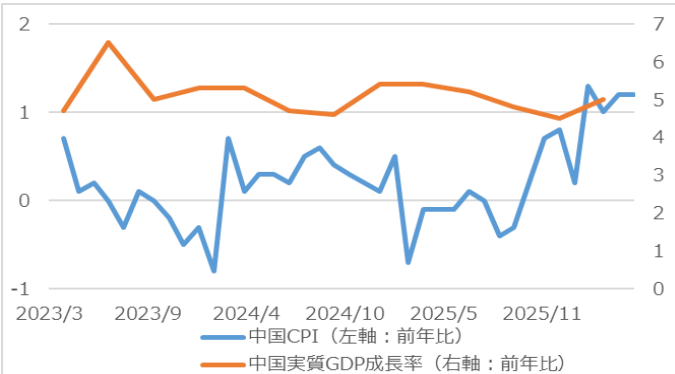
<米中問題>

中国10年国債金利は現在1.7%台と年初の1.8%から軽微ではあるが緩やかに低下傾向にあり【図2】、歴史的に見れば低水準での推移が続いている。不動産市場の低迷や内需の停滞が続いている限り、この低金利からの脱却は難しい。一方で、今後米国が利上げしていくようであれば、金利差は拡大し、人民元が圧迫される要因となるだろう。米中問題については、今年5月に開催された米中首脳会談にて、両国は貿易摩擦のさらなる激化を回避し、経済対話を継続する方針で一致した。中国は米国製品の輸入拡大など経済協力への姿勢を示し、米国も世界経済への悪影響を考慮して対話を維持する姿勢を示した。一方で、台湾問題や半導体・AIなど先端技術を巡る安全保障分野では双方の立場の違いは解消されず、具体的な進展は見られなかった。関税引き上げなどの対立激化への懸念が後退したことから一定の安心感が広がり、今回の会談は「対立の解消」ではなく「対立を管理するための会談」となった。関係性の安定化が見られた一方で、貿易問題や、台湾を巡る問題について根本的には解決していない。今後の展開には要注目。

<当面の人民元相場見通し>

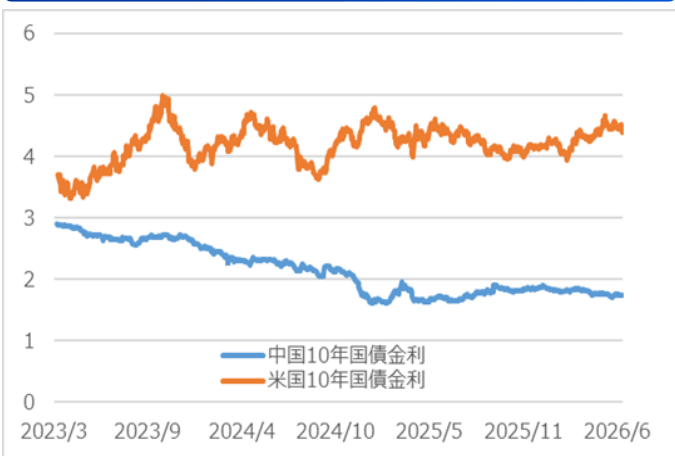
オフショア人民元（CNH）の対ドル円相場は、足元では6.80円/ドル前後と元高推移。米国の継続的な利下げにより、ドル売り元買いが続いていたことや、米中関係が比較的に安定していることが元高進行の下支えとなっているといえる。人民元の当面のレンジとしては、今後米国が利上げスタンスを維持していく限り金利差は緩やかに拡大していくものと見込まれ、徐々に元安も意識される展開か。対ドルでは200日移動平均を中心に、6.8-7.0円/ドル程度で推移すると考える。米国サイドでは、6月FOMCの内容がタカ派であったことや、会合後に発表されたドットチャートを見る限り年内1回の利上げが見通されている。一方中国サイドでは、引き続き課題となる内需拡大をどのように促進させていくかで相場方向感が決まると思料されるため、引き続き中国の経済政策動向につき注目したい【図3】。（市場営業部/松榮）

【図1】中国の実質GDP成長率とCPI（%）



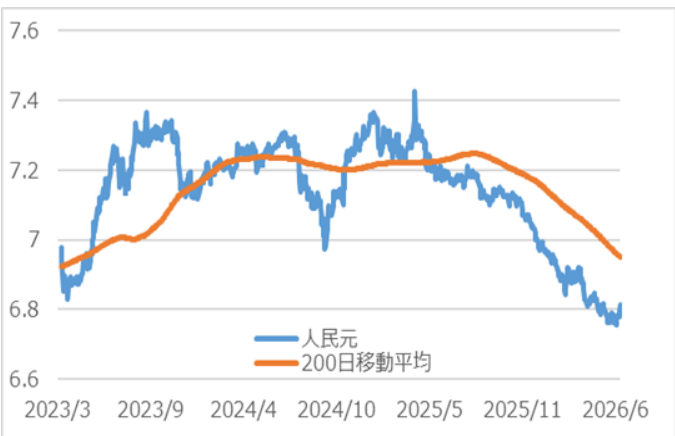
（出所：中国国家統計局）

【図2】中国と米国の10年国債金利（%）



（出所：Bloombergよりあおぞら銀行が加工）

【図3】オフショア人民元（対ドル）相場



（出所：Bloombergよりあおぞら銀行が加工）

ご留意事項

- ・本資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、取引の申し込みでも、取引締結の推奨でもなく、売買若しくは何らかの取引を行うことを助言したり、または勧誘したりするものではありません。
- ・本資料の内容につき、当行はその正確性及び完全性を保証するものではなく、一切の責任を負いません。ご利用に際しては、ご自身のご判断をお願いします。
- ・本資料に基づき、お客さまが投資のご判断をされた結果に基づき生じた損害・損失等については、当行は一切責任を負いません。
- ・本資料は著作物であり、著作権法により保護されております。無断で本資料の全部または一部を複製、送信、転載、譲渡および配布することはできません。
- ・本資料に掲載された各見通しは本資料作成時点での各執筆者の個人的見解に基づいており、それらは必ずしも当行の見解を反映しているとは限らず、また、予告なしに変更される場合があります。



商号：株式会社あおぞら銀行（登録金融機関 関東財務局長（登金）第8号）
加入協会：日本証券業協会、一般社団法人金融先物取引業協会、日本商品先物取引協会